

<日本消化器病学会 見解>
スイッチOTC医薬品の候補成分に関する見解

1. 候補成分に関する事項

候補成分の情報	成分名 (一般名)	メトクロプラミド
	効能・効果	吐き気
	OTCとしてのニーズ	効果のある吐き気止めを使用したいが、ドンペリドンは QTc 延長が「中リスク」のところ、メトクロプラミドは（リスク不確定一注意）であるため。
	OTC化された際の使われ方	—

2. スイッチOTC化の妥当性に関する事項

スイッチOTC化の妥当性	1. OTCとするとの賛否について 結論：反対
	<p>〔上記と判断した根拠〕</p> <p>【薬剤特性の観点から】</p> <p>本薬は化学受容体引き金帯 (CTZ) のドパミン D₂受容体を遮断することにより制吐作用を示します。更に、セロトニン 5-HT₃受容体遮断作用の関与や 5-HT₄受容体刺激作用による消化管運動亢進作用もあります。</p> <p>【対象疾患の観点から】</p> <p>吐き気については、末梢性嘔吐と中枢性嘔吐に大別されます。末梢性嘔吐として消化管疾患以外においても、泌尿器系疾患、産婦人科系疾患、心筋梗塞などで生じます。また、中枢性嘔吐として代謝性疾患、薬物の副作用、中枢神経系疾患などがあります。吐き気は、あらゆる疾患の副症状として出現する可能性があります。本薬は、末梢性にも中枢性にも作用することから、原因疾患の種類によらず幅広く、吐き気に対して有用であると考えられます。</p> <p>本薬は古くから使用されていることから、ドパミン D₂受容体拮抗薬として広義の機能性ディスペプシアに対して処方されることもあります。しかし頓用で使用されることが多く、長期の連用は避けるべきだと考えます。長期の症状の改善目的には、エビデンスレベルの高く中枢性作用の少ない他のドパミン D₂受容体やその他の作用機序の薬剤を用いることが多いと考えられます。</p> <p>一般的には、急性胃腸炎における吐き気に対して、最も多く処方</p>

	<p>されている薬剤の一つではないかと考えます。</p> <p>【適正使用の観点から】</p> <p>D2受容体拮抗薬に特徴的な副作用として、悪性症候群、意識障害、痙攣及び遅発性ジスキネジアなど錐体外路症状が考えられます。他のD2受容体拮抗薬と比較して脳への移行性が高いことから、連用により、これらの症状が出現する可能性が高まると思われますので、短期間の使用に留めた解熱剤、鎮咳薬のような頓用での使用が適切と考えます。</p> <p>【スイッチ化した際の社会への影響の観点から】</p> <p>急性胃腸炎にて吐き気をきたす患者は多いと思います。その際に病院に受診しなくても本薬を手にいれることができますので、OTC薬として本薬と整腸剤などが入手できれば多くの急性胃腸炎においてセルフメディケーションが可能になると考えられます。</p> <p>2. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本薬は妊婦への使用も可能であり、妊娠悪阻にも使用でき、短期の使用に限っては、原因は何であれ有効性と安全性にすぐれた薬剤である考えます。 ・OTCとする際の課題点について 吐き気に関する短期間の使用に限っては、非常に使いやすく、有効性も高い薬剤であると考えます。一方で、漫然に使用された場合においては、錐体外路症状、すなわちパーキンソン病用症状を来たす可能性もあり、それが薬の副作用と気づかれずに使用し続けられることも起こりうると思います。 原因疾患の治療ではなく対症療法のための薬剤ですから、吐き気が持続するようであれば、医療機関に受診するよう勧めることが大事だと思います。
備考	

<日本臨床内科医会 見解>
スイッチOTC医薬品の候補成分に関する見解

1. 候補成分に関する事項

候補成分の情報	成分名 (一般名)	メトクロプラミド
	効能・効果	吐き気
	OTCとしてのニーズ	効果のある吐き気止めを使用したいが、ドンペリドンは QTc 延長が「中リスク」のところ、メトクロプラミドは（リスク不確定一注意）であるため。
	OTC化された際の使われ方	—

2. スイッチOTC化の妥当性に関する事項

スイッチOTC化の妥当性	1. OTCとするとの賛否について 結論：賛成
	<p>〔上記と判断した根拠〕</p> <p>【薬剤特性の観点から】</p> <p>古くから制吐剤としての使用実績があり、医師の指示の下、安全に使用されている。ただし、悪性症候群での死亡例が報告されていることもあり、スイッチOTC化に際し注意が必要である。ドンペリドンのOTC化の可否の際に、QT延長や妊婦への使用が課題として挙げられた。本薬はQT延長によるTdP（トルサード・ド・ポワンツ）等の致死性不整脈の発現頻度についての添付文書上の記載はない。また、妊婦への使用についても治療上の有益性がリスクを上回れば使用可能である。</p> <p>【対象疾患の観点から】</p> <p>ノロウィルス等の急性胃腸炎に対する制吐剤として、短期間の使用であれば国民のセルフメディケーションに資すると考える。</p> <p>【適正使用の観点から】</p> <p>ドパミンD2受容体遮断作用による錐体外路症状等の中権神経系副作用を抑制する観点から長期使用や誤用を避ける仕組み作りが必要と考える。また、仮に錐体外路症状が出現した際には、抗パーキンソン病薬の投与など適切な対応が求められるため、積極的な受診勧奨を心掛ける必要がある。</p>

	<p>【スイッチ化した際の社会への影響の観点から】</p> <p>一般用医薬品の乱用（オーバードーズ）は、社会問題となっており、未だ十分な対策がとられているとは言い難い。本薬にもオーバードーズの危険性があるが、適正使用を推進することにより対応可能と考える。</p> <p>2. OTCとする際の課題点について</p> <p>オーバードーズや副作用の点から、反対意見も根強い。一番の課題は、OTC薬全般に言えることだが、医師の管理下をはなれることに見合う、薬剤の適正使用対策を構築できるかどうかである。本薬の場合、具体的には販売用量、用法、妊婦への販売の可否、販売時のチェック体制が課題に挙がる。さらに、副作用発現時、効果無効時等の積極的受診勧奨も徹底すべきと考える。</p> <p>3. その他</p> <p>めまい、眠気等の副作用がみられるため、車の運転には注意が必要（運転させない、運転しないこと）。</p>
備考	